

聖書：コリント人への手紙第一 1：10～17

説教題：同じ心、同じ考えで

日時：2022年1月9日（朝拝）

挨拶と感謝を述べたパウロは今日の 10 節から手紙の本論へと入ります。まず扱われるのは分派の問題です。11 節に「あなたがたの間に争いがあると、クロエの家の者から知らされました」とあります。クロエとは誰なのか聖書から知ることはできませんが、その家の者はコリント教会の内情を良く知っている人たちで、パウロが手紙を書いたエペソにいた人たちであろうということは分かります。彼らはコリント教会員で、今、エペソに来ていた人たちかもしれませんし、あるいは逆にエペソの教会員で、コリントに出かけて帰って来て、パウロにこの情報をもたらした人たちかもしれません。「クロエ」は女性の名前ですので、使徒の働き 16 章に出て来る紫布商人リディアのように、エーゲ海を挟んで小アジアとギリシャを行き来する女商人・女事業家だったのかもしれません。その家の者たちからコリント教会の間に争いが生じていると聞いたことが、パウロがこの手紙を書くに至ったきっかけの一つでした。

具体的にそれはどんな争いだったのでしょうか。12 節に「あなたがたはそれぞれ、『私はパウロにつく』『私はアポロに』『私はケファに』『私はキリストに』』とやっているとのこと」とあります。つまり教会はこのようにいくつかの党派に分かれて、互いに争い合っていました。ここで名があげられている人たちはどんな人たちでしょうか。最初のパウロはこの手紙を書いたパウロで、コリント教会の設立者です。次のアポロは使徒の働き 18 章 24～25 節に、アレクサンドリア生まれの雄弁なユダヤ人であること、聖書に通じて、霊に燃えてイエスのことを教えていたが、ヨハネのバプテスマしか知らなかったことが記されています。このためプリスキラとアクラが彼を呼んで神の道についてもっと正確に説明します。これによってアポロはさらにパワーアップして、アカイアに渡り、そこで大きな働きをしたことが使徒の働き 18 章 29～30 節にこう記されています。「彼はそこに着くと、恵みによって信者になっていた人たちを、大いに助けた。聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破したからである。」 続く 19 章 1 節にはコリントにいたことがはっきり書かれています。つまりパウロが第二次伝道旅行で一年半コリントで宣教し、エルサレムに戻るためにこの地を去った後、アポロがやって来て大きな働きをしたわけです。おそらくコリント人のある人たちは、そのアポロの宣教を見て、素晴らしい

宣教者だ！とその雄弁さのとりこになったのでしょうか。それで「私はアポロにつく」「パウロよりも私はアポロを支持する！」という人たちが出始めた。一方、いや私たちはこの教会の設立者パウロにつく！と対抗する人たちも出始めたのでしょうか。3人目のケファはペテロのことです。この手紙でも9章5節や15章5節に彼の名前が出て来ますが、特に15章5節の福音のエッセンスが述べられるところで、復活のキリストはまずケファに現れたと言われます。改めて述べるまでもなくペテロはキリストの一番弟子です。そのため、パウロの使徒性に疑問を持つ人たちの中には、私はキリストの第一の使徒であるケファにつく！と言い出す人たちも現れたのでしょうか。そして4つ目は「キリスト」です。「私はキリストにつく！」というスローガンは一見正しく思われますが、彼らも勢力争いに加わっていた人たちであることが分かります。おそらく彼らは、どのリーダーを支持するかを巡って教会で分派が生じた時、その動きを見下して、我々は直接キリストにつく！と主張した人たちだったと思われます。自分たちは人を通さずに直接的にキリストに近づく霊的エリートである、他のグループより一つ上に飛びぬけた者たちであると自認して誇り高ぶり、争いに加わっていた。

注意すべきことは、ここで名があげられている人たちが、それぞれのグループの先頭に立って指揮を執ったわけではないということです。パウロはこの後見るように、自分が党首に仕立てられていることを全く良いこととは思っていません。キリストもちろん、このようにして他のグループと張り合う党首となるはずはありません。アポロはどうでしょう。もしアポロが分派活動に一役買う行動を取っていたら、パウロはそのことを問題視したでしょうけれど、そんな兆候はこの手紙に一切見られません。むしろ彼は後の3章6節で「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」と言い、9節でも「私たちは神のために働く同労者」ですと言っていることからして、互いに一致の関係、協力関係にあったことが伺えます。ペテロも同じでしょう。ですからここで名を上げられていた人たちが、この分派活動を先導していたわけではないのです。これはコリント人たちが、自分たちの好みに合わせて勝手にあるリーダーを担ぎ上げ、党派を作り、争っていたものだったことが伺えます。

それにしてもなぜ彼らはそんなことをしたのでしょうか。その一つの大きな要因として、この教会が置かれたコリントの町という背景が考えられます。すでに過去2回の説教で申し上げましたように、コリントはギリシャの大都市で、地理的に東西南北のあらゆる方向から人々が一点に集まる交通の要衝でした。経済的に繁栄し、知識人

や哲学者たちが多く往来しました。そんなコリントは人間の知恵や知識また雄弁術に高い評価を置く当時の文化のただ中にある町でした。そんなコリントに雄弁で力強いアポロが渡って来た時、ある人々は彼の語り口やその説教スタイルに全く魅了されてしまったのです。それ自体は悪いことではありません。しかし問題は、その中のある人たちは正しくない仕方でアポロを持ち上げたことです。すなわち他の人と比較し、他の人を否定する形で、アポロを持ち上げ、そこに対立的な関係、対立的な構造をもたらしたことです。4章6節：「兄弟たち。私はあなたがたのために、私自身とアポロに当てはめて、以上のことを述べてきました。それは、私たちの例から、『書かれていることを越えない』ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることのないようにするためです。」ここにあるように、一方にくみし、他方に反対して、思い上がるという行動を取り始めた。誰が優れているか、どの人が力強く、知恵があり、神に用いられる本当の器かと評価し合い、優劣を競い合う。そして自分が支持するリーダーが高められることによって、自分をも持ち上げたい。クリスチャンとしてより高いステータスと評価を持つ者になりたい！と考えて互いに張り合っていた。他を見下しては高ぶり、また他の誰かをねたんでいた。これが教会をかき乱し、教会を壊す行動となっていたのです。

そこでパウロはコリント人たちに13節で問います。まず「キリストが分割されたのですか。」1章9節で信者たちは神に召されて主イエス・キリストとの交わりに入れられたと言われていました。キリストはお一人です。そのお一人の方との交わりにあなたがたはみな導き入れられた。なのにそうやって争い合うことによって、あなたがたはお一人のキリストを引き千切っているのか、キリストがバラバラにされたのかと問います。また「パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか」とも問います。もちろん私たちの代わりに十字架にかかってくださったのはキリストです。キリストこそ最も大事なお方です。なのに彼らが人間のリーダーの誰につくかを最も大事なことのように議論し、争っているのは、一番肝心な点を見失っているからではないのか。私パウロがあなたがたのために十字架につけられたのか、とまで彼は言います。そしてもう一つ、「あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか」と言います。「パウロの名によって」という部分は直訳すると「パウロの名の中へ」となります。確かに洗礼は「イエス・キリストの名の中へ」、すなわちキリストとの結合を意味する儀式です。それなのに「私はパウロにつく」と言う人たちは、パウロと結合したのかと彼は問います。おそらくコリント人の中には、誰から洗礼を受けたか

によって誇ったり、争ったりしているところがあったのでしょうか。今日も時々自己紹介で「私は〇〇先生から洗礼を受けました！」と語り、まるでその先生から洗礼を受けたことでより価値が高いかのように語る人、あるいは「あの〇〇先生の教会の教会員です」と誇らしげに語る人たちがいます。それはこの箇所に出てくる人たちと重なります。パウロはここで、私はむしろ少数の人にしか洗礼を授けなかったことを神に感謝していると言います。3人の名前が出ています。最初のクリスポは使徒の働き 18章 8節にコリントの会堂司として出て来る人で、コリント宣教初期の回心者です。次のガイオはローマ人への手紙 16章 23節に「私と教会全体の家主であるガイオ」と出て来る人と同じと思われます。ローマ人への手紙は第3回伝道旅行中、コリントで執筆されました。その時にパウロに宿を提供した人です。この彼は第二次伝道旅行中、使徒の働き 18章 7節でパウロに宿を提供したティティオ・ユストと同一の人ではないかと言う人もいます。また 16節に出て来る「ステファナの家の者たち」については、この手紙の 16章 15節に「ステファナの一家はアカイアの初穂であり」と出て来ます。ですから彼らも初期の回心者たちでした。パウロがコリントで洗礼を授けたのはこの人たちだけだったと言うのです。他の人々はテモテやシラス、あるいはコリント教会で立てられた働き人たちによって授けられたのかもしれませんが。パウロはあえて洗礼を授けないようにしていたわけではありませんが、結果的にコリントで、その数が少なかったことは良かったと言っています。その結果、私はパウロ先生に洗礼を授けてもらいましたと言って、そのことで誇ろうとする人が少なくて済みます。おかしな動きを助長しなくて済みます。

最後 17節でパウロは、自分の働きをどう考えているかについて語ります。まず「キリストが私を遣わされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を、・・・宣べ伝えるためでした」と言います。もちろんこれは洗礼を軽視した言葉ではありません。洗礼は主イエス様が行うよう命じておられることであり、言うまでもなく大事です。しかしパウロは、自分が遣わされたのはそのためではないと言います。自分の第一の使命は福音を宣べ伝えることだと言います。そして大事なポイントとして、ここに「ことばの知恵によらずに」とあります。この「ことばの知恵」こそ、まさにコリント教会の問題と深く関わっていた事柄でした。この「ことばの知恵」はギリシャ世界では高く評価されました。もてはやされていたのは雄弁術でした。いかに物事を流麗に、上品に、巧みに、見事な修辭的表現を用いて語れるか。それが競われ、それに長けている人が賞賛されました。しかしパウロは、私がキリストによって遣わされたのは、

ことばの知恵によらずに福音を伝えるためだと言います。「これはキリストの十字架が空しくならないようにするため」とあります。反対から言えば、ことばの知恵によって福音を語ればキリストの十字架をむなししいものにしてしまうということです。どうしてそうなのかについては次回以降、詳しく述べられます。ごく簡単に言えば、この二つは目指す方向が違うということです。この世の「ことばの知恵」は人を上へ、上へ、と押し上げようとしています。人間の賢さ、人間の知恵、人間の巧みさを披瀝し合い、人間に賞賛を帰し、人間に栄光あらしめようとしま。それに対して十字架の福音は反対です。それは人々が眉をひそめる話です。メシヤは苦しめられ、辱められ、挙句の果てに木に吊るされて最も呪われた者としての死を遂げる。人々が聞きたいと願う上品な話、優美な話とは真逆です。しかもそのキリストのむごたらしい死は私たちを救うための身代わりの死だと福音は語ります。これを受け取るために私たちは一切の自己主張を捨ててへりくだらなければなりません。自分には何もないことを告白して、ただキリストの憐みの前にひれ伏し、感謝し、ひたすらキリストに栄光を帰す者でなければなりません。これは自分の賢さや卓越さを誇り、自分への称賛を引き出そうとする「ことばの知恵」では語れないことです。それは根本的に相反するもの、両立しないものです。ですから一言で言えば、コリント人たちが「ことばの知恵」を巡って誇っていたのは、十字架の福音を見失っていたからに他ならないということです。十字架を脇へ追いやる誤った勝利主義、誤った成功主義に立っていたからです。その誤った福音理解から誤った教会生活、教会の中でも世と同じ基準で競い合う生活が出て来ていたのです。ですからパウロはこのコリント書で十字架こそ福音の中心にあり、その福音に立ち返るようにと語って行くのです。

この十字架の福音に立つ時、私たちは 10 節の勧めに従うことができる者とされます。10 節に「どうか皆が語ることを一つにして」ください、とあります。ある人は、語ることを一つにするとは個人の自由性あるいは個性が犠牲にされることではないかと考えるかもしれませんが、そうではありません。十字架の福音に立つ時、私たちは語るべきただ一つの言葉のみを持つ者たちとなります。それはキリストを誇り、その十字架を誇り、ただキリストにこそ感謝と栄光を帰そうとする言葉です。そこにおいて私たちは同じ言葉を語る者たちとされています。コリント人たちは仲間割れして、誰がすごいかと争っていましたが、十字架の福音にしっかり立っているなら、そうはならないはずです。キリストの十字架を信じるとは、キリストが私のために死んでくださったことを信じるだけでなく、古い私もそこで死んだことを意味します。それま

での自己主張、自己アピール、自己賞賛の生き方と決別して、ただキリストのみをたたえ、キリストに栄光を帰す生き方へ変えられます。その同じ心、同じ考えをクリスチャンは共通していただいているはずです。外側の見える一致は、この内側の、心における一致、考えにおける一致の現れです。

もちろん聖書が語る一致は画一的で窮屈な一致ではありません。それはそれぞれに与えられている個性、すなわち多様性と調和する一致です。この手紙の 12 章でそのことは言われます。それはオーケストラにもたとえられます。楽器は色々で、それぞれにパートを受け持ちつつ、一つの調和した音楽を奏でます。しかしもし個性を強調するあまり、自分勝手な音を出し、自分だけ目立たせて、全体に不協和音をもたらすようなあり方は果たしてどうなのでしょう。それは結局自己主張なのではないでしょうか。葬ったはずの古い自分が復活して神の教会をかき回しているだけなのではないでしょうか。本当に古い自分はキリストの十字架のもとで死んだのでしょうか。そして今やただキリストのみをたたえる思いに導かれて、今の場所に立っているのでしょうか。私たちにとっての唯一の誇りはキリストであり、また十字架です。キリストの十字架を誇る人には、それにふさわしい生き方があります。そのことを続くパウロの言葉から改めて教えられたいと思います。そして同じ心、同じ考えで、キリストをたたえる同じ言葉を語る者たちへ、そして主が与えてくださっている豊かな一致とハーモニーに生きる教会の幸いへ導かれて行きたいと思います。